

文学部

教授 岡部 玲子



すべての人間に平等に与えられている「時間」。でも、もし、当たり前にあるその時間が、あなたの知らない間に盗まれていたとしたら…？

町のはずれの円形劇場跡に住みついた女の子モモは、想像力に溢れ、町の人のお話を聞くだけで悩みを解決してしまう不思議な力を持つ。ある時「灰色の男たち」が町に現れたことで、人々の生活が変わり始める。時間の節約が生活を豊かにすると信じてせかせかと忙しく毎日を送るようになる。節約した時間が時間どろぼうに盗まれているとも知らずに。モモはどうやってこの危機を乗り越えるのか？

本書は子どもでも楽しめるように書かれた児童文学である。でも、子ども向けの物語なんて、と侮ってはいけない。大人になってからもこんなにイマジネーションを刺激される読書体験はなかなかできない。ストーリーの展開に純粹にワクワクする時間を私たちは忘れてしまっていないだろうか。特に、毎日「時間がない」「そんなことは役に立たない」「時間の無駄」などと感じている「忙しい」人にこそ読んでもらいたい。物語に引き込まれ、登場人物に自分を重ねたりしながら、いつの間にか「時間とは?」「豊かに生きるとは?」と自問自答していることに気づく。モモと他の登場人物との哲学的なやり取りは正に「時間論」であり「人生論」である。この物語を読む「時間」があなたの人生にどんな意味をもたらすのか、何度でも味わってほしい。



ミヒャエル・エンデ(1976)『モモ：時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』(大島かおり訳)岩波書店

本 館: K/943/E59 05900898
Knowledge Base: 943/E59 111068797

